

第6回U18アジア陸上競技選手権大会帯同報告

田中 健太

日本陸上競技連盟医事委員会

1 はじめに

第6回U18アジア陸上競技選手権大会が、2025年4月15-18日にサウジアラビア・ダンマームで開催された。今回、チームドクターとして選手団に帯同したので、メディカル面を中心にここに報告する。

2 選手団

選手団は、スタッフ8名と男子選手3名、女子選手5名、総勢16名により構成された。選手は全員高校生で、なかには初海外レースの選手もいた。

メディカルスタッフは、ドクター1名、トレーナー1名の計2名を配置していただいた。

3 渡航前準備

決定した選手に対しメディカルアンケートを実施した。アンケートの結果、腰椎分離症1名、腰痛1名、ハムストリング肉離れ2名の選手がピックアップされ、事前に連絡をとって状態の確認を行った。跳躍選手1名、短距離選手1名、投擲選手1名は、

渡航の時点でケガによる痛みなどはコントロールされているが、通常の練習をこなすことができていない状況であった。本人、チームともに出場の意味があったため現地での状態確認を行うこととして渡航に至った。

男女共に処方薬やサプリメントを内服している選手がおり、事前に薬剤師と連携を取りながら成分を確認したのち、選手にも内服に関する注意点などを説明した。特に今回はプレドニゾロンを内服している選手がいたためTUEが付与されていることを事前に確認した。その他、漢方薬などを内服していた選手には使用中止を勧めた。

4 渡航および宿泊地について

4月12日14:00成田空港第2ターミナルに集合した。搭乗手続きにトラブルはなかったが、時間が長くなり16:55発のフライトにもギリギリ搭乗となった。経路としては東京からドーハを経由してダンマーム空港に到着するというもので、乗り継ぎ時間を含めて計18時間の移動であった。選手・スタッフには機内でも適宜体を動かしながら過ごすように



写真1：選手村の衛生状態は良好

案内し、各自工夫しながら過ごしていた。成田からドーハは12時間のロングフライトであったが、体調不良を訴える選手やスタッフはいなかった。その後、空港から選手村まではさらにバスで1時間ほどの所要時間であった。

初日は試合会場での練習を行わず選手村周辺で軽く体を動かす程度となった。体を動かすのに不調を感じるほどの時差ボケを訴える選手はいなかった。宿泊施設は大きなリゾートホテルで、選手団には2人部屋が割り当てられた。今回は男性メディカルスタッフの部屋をトレーナールームとした。トレーナールームにはマッサージベッドを1台設置し、トレーナーによるマッサージなどの施術、ドクターによる診察を行った。シャワー・トイレは各部屋に設置されていた。温水・シャワー圧・トイレの清掃状態などは問題なかった(写真1)。

アメニティーはバスタオル、タオル、ボディーソープ、シャンプー、コンディショナー、歯磨きセット、髭剃りなど、十分にそろっていた。シーツ交換などは希望すれば毎日行ってくれた。ランドリーはなく、1日3点までホテルで洗濯してくれるサービスであったが、利用する人は少なかった。食堂はホテル内のレストランでビュッフェ形式であった。食事はおいしく、スパイスのきいた現地ならではの煮込み料理や、それらを世界各国のメニュー風にアレンジした料理が提供された(写真2)。パスタやパン、ドーナツなどもあり好き嫌いがあっても問題ないくらいのバリエーションであった。生野菜等も提供されていたが衛生的には問題なく、食事が原因と思われる体調不良は発生しなかった。飲用水はホテルでも会場でも十分量提供され、不足することはなかった。



写真2：食事は衛生的でバリエーション豊富

5 大会運営および会場環境

宿泊地から大会会場まではバスで30分～1時間程度の移動が必要であった。時刻の決まったシャトルバスはなく、日本担当の現地大会スタッフが必要な時間に手配してくれるというシステムであった。渋滞によってバスが遅れることがしばしばみられた。乗り物酔いがひどい選手などはおらず、嘔吐や酔い止めなどを使う事象は発生しなかった。

競技場・サブトラックは日差しが強く気温も高かった。大会前日には39℃を超える気温で、非常に暑かったが、それ以降は最高30℃程度、最低23℃程度の気温であった。風が強く、乾燥していたためWBGTは16-20℃と低かった。暑さや寒さで体調を崩す選手・スタッフはいなかった。砂漠地帯であるため、サブトラックや投擲競技場には砂地がみられ、芝生のフィールドにも薄く砂が堆積していた。(写真3)1-3日目には競技場内で4mを超える風が終始吹いており、サブトラックではそれ以上であった。当然競技成績に影響があったが、それ以外にも砂塵が目に入るなどの影響がわずかながら見られた。それらによって体調を崩す選手はみられなかった。





写真3：走ると砂が舞う環境

競技運営についてはタイムテーブルに不備が多く、特に表彰式の時間が頻繁に変更されたため、ドーピング検査や帰りのバスを呼ぶ時間に影響を与えた。

医務室は競技場外に設置された仮設テントで運用され、ICU用のベッドとモニターが3台配置されていた。医師が2名は常駐しており、その他サブトラックにも医務室が設置されていた。Heat Deckは設置されていなかった。日本選手が救護対象になることはなかったが、他国選手がハムストリング肉離れと思われる状態でコース上に倒れた際には、会場内の観察救護担当が車椅子で医務室に搬送していた。協力病院は競技場から5分くらいの場所にあるという話であったが、今回利用・訪問することはなかった。

6 医療活動

渡航前のメディカルアンケートで腰椎分離症1名、腰痛1名、ハムストリング肉離れ2名の選手がピックアップされていたため、現地入り初日に状態の確認を行った。それぞれ試合出場は可能と考えられたため、肉離れ後の選手は連日チェックをしながら調整を行った。全選手とも日々状態がよくなっていき、ケガの問題はなく試合に出場できた。

試合当日はトレーナー1名がウォームアップ場で活動しドクター1名は競技場内の観察とドーピング検査対象者の付き添いを行った。

競技中の負傷者は0名であった。

7 ドーピングコントロール

対象者は3名、全員が日本国内外含めて初めての検査であった。アジア陸連ならびにサウジアラビア

のDCOの皆様が丁寧に選手の対応をしてくださり、和やかに検査が行われた。本大会ではジュニアの大会であったためか、検査用紙記載のための下書き用紙が準備されており、一度下書きしたものをDCOが書き写していた。

8 成績

金メダル3個、銀メダル3個、銅メダル1個

参加国中3位、日本チームとしては参加8人中7人がメダルを獲得した。

9 総括・課題

本大会は少人数であったこと、長時間移動を伴う海外遠征であったこと、飲用水等に懸念があったことが特徴的であったが、幸いそれらに伴うトラブルは発生せず、競技への影響は最小限であったのではないかと考えられる。ジュニアの育成方針に従い、トレーナーのケアもセルフコンディショニングの指導に重点をおきつつ持ち込みのケガに対するの対応を行い、不安なく試合に送り出すことができた。スタッフ間の連携も円滑に行う事ができたと思われ、特にトラブルはなかった。順位・記録ともに試合結果もよく、良いサポートができたのではないかと考えた。

サウジアラビアでの食事やシャワー等の衛生状態が良好であること、現地の方々が旅行者に対して非常に親切であると経験できたことも収穫であったと考える。